法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-08-14

そとぼり通信No.36

(出版者 / Publisher)
法政大学国文学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文學誌要
(巻 / Volume)
59
(開始ページ / Start Page)
105
(終了ページ / End Page)
111
(発行年 / Year)
1999-03-24

そとぼり通信

No. 36

春日贈新學士　黒田渾沌

東風吹御溝　百樹發櫻花　盛壯新生志　更伸緑嫩芽
東風　御溝に吹き／百樹　桜花を発く／盛壯たり　新生の志／更に伸ばせ　緑嫩の芽

一期一会。より良き出会いは諸君の心をより豊かにする。　苙原　淳

いつまでもスリムでいよう。余分なものを身につけないで。　佐川　誠義

大学には卒業がありますが、人生には卒業はありません。すべてはこれからです。　坂本　勝

「人間万事塞翁が馬」ですよ。だから、人生笑える時に大いに笑っておきましょう。　間宮　厚司

学生の名前はすぐ忘れます。街で会ったときには、まず自分の名前を名乗って下さい。　小秋元　段

人やものに具体的にぶつかり、迷いに迷い、悩みに悩んで、何かの手懸りを掴んで下さい。　掘江　拓充

「人生は何事をも為さぬには余りに長いが、何事かを為すには余りに短い」（「山月記」から）　勝又　浩

こう有りたいという形を求めて何度でもトライして下さい。遅いという言葉を辞書から消して。　日暮　聖

世紀末に旅立つ皆さんに『閑吟集』の謡（うた）を贈ります。「たゞ人は情けあれ、槿（あさがお）の花の上なる露の世に」　天野　紀代子

「若い時に旅をしなければ老いての楽しみがない」（狂言の諺）、若者よ、大いに旅をすべし。心の旅も。　西野　春雄

天野ゼミ

卒業にあたり

清宮大輔

あっという間の四年間だった。入学から卒業まで、一気に駆け抜けたように感じられる。この四年間で、自分はどれだけ成長でき、何がやれたのだろうか。入学前に抱いていた目標は達成できたのか。そう考えると、自分は何もやれていなかったのではないかと思い、恐怖に似た感覚を抱く。しかし、矛盾するかもしれないが、それでもいいと思える一面もあるのだ。この四年間、自分としては精一杯やってきたと思えるからだ。そして良き師、良き友、そして良き先輩後輩に出会うことができた。ゼミ担当の天野紀代子先生には、ゼミだけでなく多岐に渡り御指導頂き、ゼミの仲間には助けられ、多くの友と励まし合いながら、四年間、喜怒哀楽を共にしながら頑張ってきたと胸を張っていえるからだ。

やり残したことはないと言えば嘘になるが、法大生としての自分に納得はいっている。今後、新たな人生に向けて、法大OBとしての自覚と誇りを持って頑張って行けると今思う。

坂本ゼミ

須田久美

春は萌え　夏は緑に紅の
　綵色に見ゆる　秋の山かも

萬葉集所収のこの歌からは、季節の流れに伴って外界を彩る風物、景色の色彩が、今にも溢れ出そうな勢いを以て詠歌されている。

季節の巡り行く中で、その時々に齎(もたら)される景物に心揺(うご)かされる感性には、何時の時代にも変わらぬ普遍さが存在する。

法政の校舎は外堀通りと靖国神社に挟まれ、都心に在りながら意外な程身近に自然が在った。春は桜が咲き誇り、夏は木樹が新緑に燃え、秋は水辺と木葉に鬱金(うこん)、呉藍(くれない)、琥珀(こはく)、錆色(さびいろ)の莫細工(モザイク)が施され、冬は霜枯れた枝の隙間から透んだ空が覗いた。水鳥の訪問も頻繁で鵜が飛翔し、鴨が渡り、鷗が飛来し、白鷺が栖(す)んだ。

その中で、春は花筏、夏は緑蔭、秋は照葉、冬は碧空を密かに賞(たの)しみながら通った路を私は屹度忘れない。そして、何時迄も心に留め置く事だろう。

坂本ゼミ

長竿敦子

人の歩き方と、生き方とは似ているのではないか、と思う時がある。私は良く、「突進するように歩くね。」と言われるのだが。

たまに無性に歩きたくなる。長い道程を用もないのに突進するように歩く人、光景としてもかなり異様だろう。一歩一歩踏み出し、歩き続けるのにもかなり勇気はいる。途中で何度バスに乗ろうと思うだろうか。なぜこんな意味のないことを、と思うだろうか。

裏では、常に迷いながら四年間を突進してきた。結果は出ないかもしれない、歩き続けた事に意味はあるのだろうか。ただひたすら時にはバスに乗るのも良いと励まし、道を示して下さった多くの方々、そして、間違った道と知りながら、共に歩んでくれた友人達にまた会えるのが嬉しくて歩き続けてきたのだ。

これからの道には何が待っているのだろう。歩き出せば、また道に迷うかもしれない。しかし、私はきっと歩かずにはいられないのだ。

なぜなら、私は歩くことが好きなのだから。

安藤（黒田）ゼミ

大学生活を振り返って

吉井久子

私の大学は電車の中だった。というと、言い過ぎかもしれない。しかし、電車の中でいかに有意義な時間を過ごしたか。電車通学にかけた時間（往復四時間）が決して無駄ではなかったと思っている。退屈な四時間から救ってくれたのが、本だった。私にとって、読書は生活の一部だといえるかもしれない。本を読むことによって得ることは無限で、自分自身を知るということにもつながっていると思う。また、一冊の本と出会うのは一人の人間に出会うのと似ているのではないかと思ったりする。「人間を知る」ということが、大学へ行く目的の一つだったのだが、読書はその手段としても有効であると思う。電車の中ではない本当の大学から得たことも多いが、「それはまた別のお話」である。

「人間とはなにか」ということが、私の人生のテーマであり、そのために本を読み続ける限り、私の「大学生活」が幕を閉じることはないかもしれない。

間宮ゼミ
ゼミの思い出

鈴木聡

他のゼミがどんなゼミなのかよく知らないが、おそらく間宮ゼミは妙なゼミだったのではないだろうか。一人でテーマを見つけ、一人で研究し、発表してレポートにまとめる。半ば放り出されるようで不安な反面、自分のやりたいように研究ができる自由奔放さは、間宮ゼミならではの特徴だろうと思う。

各自の発表にしても、テーマによって全然中身が違うので、あんまり参考にならない。結局は手探りで自分で考えてやるしかないのだ。思えば学生一人一人の全く異なるテーマに対して、よくも適切なアドバイスを丁寧に間宮先生はして下さったものだと感心する。ものぐさな先生だったら、こうはいかない。

僕自身にしても、「カタカナ表記の研究」の名のもとに漫画を扱ったりと、かなり無茶なものだったと我ながら思う。こんな変わったテーマでも認めてもらえるゼミは、やっぱり間宮ゼミだけだったに違いない。

間宮ゼミ
ゼミの思い出

天野陽子

何かと忙しかった私は、サークル等に所属しておりませんでした。それだからか、ゼミの授業は私の中では最も大学生らしい思い出となりました。

私は四年生からではありますが、間宮先生のゼミを履修することになりました。妙な話ですが、「ゼミコンパ」や「ゼミ合宿」はここではじめて体験したのです。

幸いなことに、間宮ゼミという所はいくつかの厳しい条件をクリアーすれば、実に和気あいあいとした場所でした。途中参加のような立場の私でも、心地よく、緊張せずに参加することができたのは、ひとえに間宮先生の柔らかな口調（時に厳しい指導もありますが）と、気の合った友人たちに恵まれたからだと思っております。

最後の卒論（題目は「漫画の表現」）は相当に苦労しました。しかし、楽しみながら書けたので、良き思い出になりました。

杉本（小秋元）ゼミ

社会への滑走路たる四年間を振り返って

三好規夫

思うに、私はこの四年間で実に様々な人達と出逢ってきた。大学は社会への滑走路であると位置づけてきた私に、今迄の出逢いは実に様々な刺激を与えてくれた。大学の内外で稽古してきた合気道を通じては相手に対する礼を、ゼミ長まで務めさせて頂いたゼミでは他者と議論し考察することを、教職の講義や教育実習では人を導くということを学んだが、自分で考え、自分で道を切り拓くという姿勢を持つことを学んだことが一番大きい。勿論一人よがりではなく周囲の中の自分を認知しておくことは当然であるが、様々なバックボーンを持つ人達が一つ所で四年間を共に過ごす、大学の素晴らしさはそこにあると思う。

これからも、常に人との出逢いを求め、大学で培った「考える」姿勢を持ち続け、今迄出逢った人達との絆も大切にして人生航海をしていこうと思う。

勝又ゼミ

大学生活をふり返って

菊池久美子

長い人生の中で大学時代ほど自由な時間は他にないのではないでしょうか。自由であるということは逆に言い換えれば自分から積極的に何かやろうとしなければ何も出来ないということですが、私にとって法政大学で経験した数々の出来事――特にゼミ長になったことやサークルでボランティア活動を行ったことは印象的ですが――それらの中で改めて自分を見つめ直し、自分がこれからどの様に生きたいのかじっくりと腰を据えて考えることが出来たのは、大学時代の一番大きな収穫です。

私は今後、老人福祉施設で介護の仕事に就こうと決めました。専攻とは異なる分野ですが、文学を学び、また大学生活全体を通じて養ってきた自分なりの人間観や人生観はこれからの私の大きな糧となってくれるでしょう。

大事なのは、大学で単に知識を得ることや経験をすることなのではなく、そこから自分が何を感じ、どう考えたのか、自分自身の意識を養うことなのだと思います。

勝又ゼミ

感動

高橋直樹

四年という月日は短いようで長い。この長い月日の中で、私達学生はいったい何を得たのだろうか。それが学問であるにしろ、友であるにしろ、得るものはあったはずだ。そう考えれば、今ここに私があるのも先生を初め、ゼミの仲間やたくさんの出会いがあったからに違いない。そうした自分の心情をうまく表す言葉が見つからないのが口惜しい。あえていうなら、私はいま「感動」している。この月日に「感動」をしている。

世の中は困難が多い時代のようだ。しかし、そのような時代であるからこそ、私達はこの「感動」を大切に、生きて行こうと思う。そして、そうすることが、師や友への恩返しであると思う。出会った全ての人々の御健康をお祈りいたします。

日暮ゼミ

四年間

◆数年間学校に在籍する間、サークル活動に励んだり、松屋（牛めし）と世界文化フォトのバイトで大学生活のほとんどを費やしたり、ま、どちらかといえば楽しいことの方が多かった。

◆六大学野球の応援、アリオンコール、六旗の集い、ゼミ合宿等。ゼミやサークルでいろいろな人と出会い、楽しい大学生活を送ることができました。

◆四年生最後のゼミ（1／12）で卒論の解決の光が見えた矢先に卒業となってしまい、心残りですが、四月から社会人として頑張りたいと思います。あぁ、その前にゼミの四年生でスキー旅行にいきます。

◆土壇場においていつでも大逆転はありえます。焦る気持ちを抑えて、冷静にあきらめずに突き進んでください。

◆日暮先生、ゼミの皆さん、お元気で。

（内田・岸・塚原・床井・白神・長塚・野間）

日暮ゼミ

日暮ゼミ回顧録

もとゼミ長
シャミセニスト
氏原

だってゼミだもん。楽しく、発言しやすい雰囲気を創りたい。とにかく仲良くやりたい一心から近世文学研究者らしく「歌舞伎ツアー&文楽ツアー」を企画（って言うか私の趣味なだけという噂）。合宿のテーマも簡潔に「夏だから怪談」。趣味を持ってもらえる話題作りをしてきたつもりでしたが、イマイチ研究に結びつかなかったらしい…反省…。

こんなもとゼミ長の最後の企画は「温泉旅行」。最低決行人数二人のはずが、フタをあけたらほぼ全員参加。いつのまにか絆だけはしっかりと結びついていました。研究にはなかなか結びつかなかったけど、こんな私達を受け入れてくださった日暮先生には心から感謝です。でも本当はもっと創造力をかき立てられるような何かをやりたかったし、それを望まれていたんだと思います。「無難」なんて事、考えちゃいけない所ですよ。ココは。

（写真：法政大学富士見キャンパスにて）